
soundless truth

衣月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s o u n d l e s s t r u t h

【Nコード】

N 7 6 0 1 Y

【作者名】

衣月

【あらすじ】

とても小さいけれど
聞きたい言葉があったから
僕は歩き続ける

体に刻まれた言葉？

今回の時間も失敗だった。

敗因はやはり、あの気を抜いた瞬間に手を持っていかれたことだろう。体がいくら無限でも、やはり気を引き締める必要があるな。だが次こそは成功させる。どんなに苦しくても・・・

だからどうか

まだ希望を閉ざさないでいてくれ。

本当のことを言う。

俺はもう分からないんだ。

どこから間違えたか、どこまで続くか、どこで終わりか。何ひとつ分からない。

今体に刻むこの言葉も思いも、まだ確かに覚えているのは、ひとつだけ。

「この輪を抜け出す」それだけだ。

どうかどうか

まだ君の側にいさせて

一回目の時間？（前書き）

新しい連載を始めました

二話目そうそうに言うのもなんですが、私は今高二で来年は大学受験
国立目指してるのもう受験勉強はもちろん始めています

なので、更新は亀になりますが、コツコツ書き進めようとは思って
ます

たまに、「あ、そういえば」で見に来るくらいの気持ちでお待ちく
ださい

一回目の時間？

まだこの肌が黒い染みひとつ知らずに白かった頃だ。それは風化することなく記憶に記されたまま。

あのときの僕は君をほとんど知らなかった。優しい少女だった。美しい少女だった。謎めいた少女だった。その三つの形容だけで埋め尽くされるほど、君と過ごした時間は短かった。もう戻らない日々はそれでも、消えることもなくいつも目の前にあった。

最初に言った言葉も覚えているよ。

「もう少し小さいかと思ってた」

顔を知っていてもお互い話すことはなかった。初めて横に並んだとき、お互いの声を教え合ったよね。

「私の方が年上ですよ」

敬語なんて使う年じゃない、まだ年齢の違いさえ数えられない、そんな僕を柔らかい笑顔で包んだ。

「君の名前は何？」

「あら、まだ知らなかったかしら」

「うん。僕は君としか呼んでないよ」

「ならそれでいいじゃない」

「良くないよ。だってたくさん人がいたら分けて呼べないよ」

「面白いことを言うのね」

「へ？ どうして？」

「ここにはあなたと私しかいないじゃない。私たちが分かればそれでいいのよ」

「まあそうだけど」

「ねえ、あなたは親に会ったことがある？」

「親？ んー、あの人を親って言うならいるかな」

「親に会いたい？」

「ううん、別に。だって楽しくないもん。あの人はいつもホネに話しかけてるだけだよ」

「誰の骨かしら」

「僕はその人と話したことないから知らないよ」

「じゃあ、あなたと私が二人でずっといても、あなたを連れ戻しにこないかしら」

「大丈夫だよ。だからずっと二人でいれるよ」

「どうしてここには私たちがしかないのか分かる？」

「分からないよ」

「魔法のおかげかもね」

「じゃあ君は魔法使いだね」

「ええ、そうね。あなたが私に会えるように魔法でここに連れてきたの」

「そっか！ 君が魔法使いでよかった。ありがとう、君に会わせて

くれて」

美しかった。目に映る何もかも。光に満ちている。天使の羽が舞い降りる。春の花が咲く。

けれど、何よりも美しいと思うのは君だった。

僕は言ったよね。

「君はすごくきれいだね。君がいるから全部がきれいに見えるよ。

君は僕の太陽だよ」

そうやって無邪気に笑った。君も笑った。どこかほんのすこしだけ、疲れた顔で。あのと看、疲れたのか聞いた僕に不思議な笑顔で君は何でもないと笑ったよね。

こんな何もない部屋で、二人だけで時を過ごしていくなんて夢を見なくなるほど、君は好意を抱かずにはいられない存在だった。

だから、真つ赤なナイフとやけにリアルな君の脳の感触に気付いた瞬間、どれほど夢だと信じて疑わなかったかは想像できるだろう。

どうしてそもそもナイフなんてあったのか、それまで何をしてい

たのか。

僕はだんだん冷たくなっていく手の平を見ながら独りで宙を泳いでいた。

記憶がなかった。

気付いたらもうすべて終わっていた。

もしここで僕がほんの数時間前のことだけでも思い出していれば、全く違う未来があったはずなのに。

もしあのととき、僕が君をもう少しだけでも理解していたならば、窓ひとつ扉ひとつないこの部屋でも、君を救う方法があったのかな。そんなことを悶々と考えながら頭を白くさせていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7601y/>

soundless truth

2011年11月22日23時49分発行